

第2回雑詠句会結果発表（選句&選評）

25点 言い訳をぐいと飲みこむ寒の水

本田 圭子

20点 縄跳びの少年風になる途中

本田 圭子

12点 相槌をうつ相手なく冷奴

早澤まり子

10点 家中の声を搗き込む草の餅

田中 充

10点 立春の光を入れてジャムを煮る

神 慶子

9点 制服が光をはじき入学す

佐藤 珠幸

8点 銃口にペンは勝るや春の雪

足立 攝

8点 戦火呑む入道雲の喉仏

足立 攝

8点 捨てマスクありて枯野はまだこの世

河野 輝暉

8点 鉛筆の先より春の深まりぬ

本田 圭子

8点 沸点の低き連れ合ひ山笑ふ

吉田 素子

《7点句》

目覚めれば笹鳴く声は亡き子かも
菜の花の沖に夕日を閉じこめる
陽炎を追ってふるさと遠くする
轉りや無骨な夫の片えくぼ
地に遊び風に遊ばれ春の色

河野 則子
足立 攝
上田たかし
鎌倉真由美
鎌倉真由美

いちめんの菜の花旅に出よと言う
戦争がそこに来ている若葉寒
アネモネのやけに明るき退職後
微笑めばほほえみ返す桜五分

神 慶子
吉田 素子
陣野千恵子
飯田 幸子

《6点句》
廃屋をまた埋めてゆく諸葛菜
春愁を掃いて集めて燃やしをり
目的地どこかあるらしなめくじり
春の野や子どもガイドの声弾む
母の日の蕾で届くクレマチス
陽炎の父の背中が遠ざかる
人間を休み長閑や入院す
若葉泣く砲撃音の日出生台

幸谷 恵子
倉迫 順子
岸本千鶴子
赤峰佐代子
甲斐 順子
御手洗豊海
松廣 李子
佐藤 哲夫

《5点句》

百年の家より高くこいのぼり
春耕や土ふくよかに匂う時
生れるも死するもさだめ大銀河
みどり児の笑顔まぶしき若葉風
さくらんぼ上げる子もなく過疎の村
石蹴って聞く早春の川のおと
蟻が這うドームは今も爆心地

赤嶺 信子
井上 則子
御手洗豊海
御手洗豊海
灘波 瑞枝
谷川 彰啓
谷川 彰啓

淋しくてもう風船になつて
花の雲旅立つときは杖捨てて

《4点句》

仏壇に自慢の西瓜見てもらう
宿坊の御仏と寝る夏布団

色を足す画家のパレット春が来る

ハンカチに悲喜こもごもを折りたたむ

記憶力妻の勝ちです春うらら

白梅の幹の愁いを数えけり

味噌の濃き漁港の朝餉合飲の花

庭下駄をつつかけて聞く初音かな

またひとつ歳をかさねて花は葉に

麻酔覚め春はあけぼの賜りぬ

方言をまる出しにする立夏かな

我もまた宇宙のひとつ犬ふぐり

告げもせず告げられもせず花菜道

菜の花の隙間に伊方発電所

落書きを砂に残して春逝けり

《3点句》

桜散る窓や抜歯のうがい水

無常とは美しきかな花吹雪

銅像を柔らかくして八重桜

茎立ちや戦火の中で産まれし子

春愁や溜息ばかり父に似て

秋晴れや旅行かばんを捨てに行く

青き星憤り哀しみ飛花落花

手編み物ばかりの遺品昭和の日

あつさりと裸木でいる齡かな

夏場所を父に奮発溜席

診察の無口な先や冬怒涛

啓蟄や昭和を点す義母の帯

のどけしや余さず使う鋏の音

八月を支え切れない仁王かな
水ぬるむ少しきつめの名古屋帯

おとしぶみ封をきられぬまま遺品

ウクライナ空が泣いてる春の雨

類なでる風はみどりに蕨摘む

自転車の補助輪外す花ミモザ

巢燕に賑はひ託すシャッター街

四月来ぬ吾子みし部屋の広きかな

八月の空鶴を折る葉包紙

ひっそりと春を動かす大吊橋

花おわる樹にやわらかき乳房かな

轉を抱いた小枝を生けてみる

筍が皿が立派でかきこまる

更衣して二の腕をあざとくす

杖を置き青葉若葉の中をゆく

《2点句》

万緑の中へ初孫呱呱の声

飛花落花遺影を飾る時來たる

風光る石仏の手に塩むすび

ど忘れの文字と向き合う蝶の昼

ありがとう今更妣に秋の暮

山藤や青蝶の舞ふ四季彩路

苺買う草冠の母を買ふ

オムライスパセリは平和の証なり

空蟬の秘かに残る記憶かな
紅梅の色に負けじと下駄鳴らす

子雀よそこは私の通り道

長雨やここで角出せ蝸牛

細身のスーツかぎろいてゆく東京便

夢でなら会える亡き人麦の秋

まだ残る肌のぬくもり走り梅雨

パンデミック群れて騒ぐな寒鳥

死ぬな負けるなキープの民よ雪解道

歳よりも葉増えゆく半夏生

麗かや戦う国も同じ空

連休の家族写真のお年玉

一筆箋届きますよう花筏

陽炎に巻かれて絆ほころべり

花冷えや子の元へ発つ友愁う

嬰兒の乳の匂いや緑立つ

故郷の土手は今頃犬ふぐり

ゆく春を夫婦二人で惜しみけり

かけ出してもかけ出しても青い空

花愛でて熟女五人の酒五合

春の雷ふしぎな夢を見ていたり

ウクライナの戦火テレビに菜飯食む

手をつなぐその指先に若葉風

第2回 雑詠句会作品集(点盛)

1 ③ 桜散る窓や抜歯のうがい水 河野 則子

2 ⑦ 目覚めれば管鳴く声は亡き子かも 河野 則子

3 ③ 無常とは美しきかな花吹雪 河野 則子

4 ① 春なのに出るはためいきコロナなり 大神 愛子

5 鏡見てマスクはずせばシワ増えし 大神 愛子

6 娘と孫朝の化粧競い合う 大神 愛子

7 ⑧ 銃口にペンは勝るや春の雪 足立 攝

8 ⑦ 菜の花の沖に夕日を閉じこめる 足立 攝

9 ⑧ 戦火呑む入道雲の喉仏 足立 攝

- 10 ① 信玄餅無念の甲斐や富士黙る 谷本 親史
- 11 忍野富士大盃若葉を併せ呑む 谷本 親史
- 12 いくたびも見返る富士や春霞む 谷本 親史
- 13 ① 冬の蚊に肉体ありや神がいて 河野 輝暉
- 14 さくら散つて無常迅速ウクライナ 河野 輝暉
- 15 ⑧ 捨てマスクありて枯野はまだこの世 河野 輝暉
- 16 ① 桐の花咲いて戦の続きおり 坂本 一光
- 17 ① ウクライナの戦いつ止む風知草 坂本 一光
- 18 ② 万緑の中へ初孫呱呱の声 坂本 一光
- 19 ② 飛花落花遺影を飾る時来たる 安森 範明
- 20 春光や先輩卒寿ピアノ弾く 安森 範明
- 21 ③ 銅像を柔らかくして八重桜 安森 範明
- 22 ⑤ 言い訳をぐいと飲みこむ寒の水 本田 圭子
- 23 ⑩ 縄跳びの少年風になる途中 本田 圭子
- 24 ⑧ 鉛筆の先より春の深まりぬ 本田 圭子
- 25 兄ちゃんの辛夷咲いたか二度の地震 白土 正江
- 26 ③ 茎立ちや戦火の中で産まれし子 白土 正江
- 27 ② 風光る石仏の手に塩むすび 白土 正江
- 28 ⑦ 陽炎を追つてふるさと遠くする 上田たかし
- 29 ③ 春愁や溜息ばかり父に似て 上田たかし
- 30 ② ど忘れの文字と向き合う蝶の昼 上田たかし
- 31 ① 雨の降る度ごと世界草萌ゆる 安田 文
- 32 ① 散椿集め華やく花手水 安田 文
- 33 ② ありがとう今更妣に秋の暮 安田 文
- 34 ④ 仏壇に自慢の西瓜見てもらう 赤嶺 信子
- 35 ③ 秋晴れや旅行かばんを捨てに行く 赤嶺 信子
- 36 ⑤ 百年の家より高くこいのぼり 赤嶺 信子
- 37 愛猫は雀隠れに座して待つ 野上 眞司
- 38 鹿威し夜明けの静寂に時刻む 野上 眞司
- 39 老松の羽交締かな菰の巻 野上 眞司
- 40 ① 卒業の五十年後も友で居る 幸谷 恵子
- 41 ⑥ 廢屋をまた埋めてゆく諸葛菜 幸谷 恵子
- 42 ① 陥落のクレミンナにも夏つばめ 幸谷 恵子
- 43 ほんだわらうねりにまかせ浜女 菅 勲
- 44 ① 名水の甘さ高まる女郎花 菅 勲
- 45 ① 秋蝶の山にもどりて人を恋う 菅 勲
- 46 ② 山藤や青蝶の舞ふ四季彩路 林 香澄
- 47 菫鉢ヴェージュの蛙ボンジュール 林 香澄
- 48 ③ 青き星憤り哀しみ飛花落花 林 香澄
- 49 ③ 手編み物ばかりの遺品昭和の日 有村 王志
- 50 ① 寂しさとう頑固のひとつ冬の岩 有村 王志
- 51 ③ あつさりと裸木でいる齡かな 有村 王志
- 52 ④ 宿坊の御仏と寝る夏布団 田代 直之
- 53 ③ 夏場所を父に奮発溜席 田代 直之
- 54 ② 苺買う草冠の母を買ふ 田代 直之
- 55 上を向きちゃんと歩こう花水木 油布 晃
- 56 ④ 色を足す画家のパレット春が来る 油布 晃
- 57 ② オムライスパセリは平和の証なり 油布 晃
- 58 ③ 診察の無口な先や冬怒涛 立麻 琴路
- 59 ① 春寒や生かされ幸せ四苦八苦 立麻 琴路
- 60 ④ ハンカチに悲喜こもごもを折りたたむ 立麻 琴路
- 61 ① 春昼や半額パンを半分コ 永松左世美
- 62 ④ 記憶力妻の勝ちです春うらら 永松左世美
- 63 ① 磨崖仏縁にすがる藤の花 永松左世美
- 64 小春日に遠出もせず猫鼯 早澤まり子
- 65 再びの生命つないで茄子を煮る 早澤まり子
- 66 ⑫ 相槌をうつ相手なく冷奴 早澤まり子
- 67 ③ 啓蟄や昭和を点す義母の帯 菅 攝子
- 68 ④ 白梅の幹の愁いを数えけり 菅 攝子
- 69 ③ のどけしや余さず使う鍬の音 菅 攝子
- 70 ② 空蟬の秘かに残る記憶かな 菅 登貴子
- 71 ① 農作業愛しむ母の秋日和 菅 登貴子
- 72 幸福を集めし空の小春かな 菅 登貴子
- 73 ② 紅梅の色に負けじと下駄鳴らす 嶋末 洋子
- 74 ② 子雀よそこは私の通り道 嶋末 洋子
- 75 ① 白き息豊後の山にふきかける 嶋末 洋子
- 76 竹の子の茶髪となりし売れのこる 時松由美子
- 77 ③ 水ぬるむ少しきつめの名古屋帯 時松由美子
- 78 ② 長雨やここで角出せ蝸牛 時松由美子
- 79 ⑩ 家中の声を搦き込む草の餅 田中 充
- 80 ① 春愁や余生がしぼむ疫病の世 田中 充
- 81 ① 白牡丹崩れて庭の夜気重し 田中 充
- 82 ① 七十路の胸に小さき野火一つ 倉迫 順子
- 83 ⑥ 春愁を掃いて集めて燃やしをり 倉迫 順子
- 84 ② 細身のスーツかぎろいてゆく東京便 倉迫 順子
- 85 ② 夢でなら会える亡き人麦の秋 岸本千鶴子
- 86 ③ 八月を支え切れない仁王かな 岸本千鶴子
- 87 ⑥ 目的地どこかあるらしなめくじり 岸本千鶴子
- 88 ④ 味噌の濃き漁港の朝餉合歓の花 園田 武子
- 89 ② まだ残る肌のぬくもり走り梅雨 園田 武子
- 90 ② パンデミック群れて騒ぐな寒鳥 園田 武子
- 91 ⑦ 轉りや無骨な夫の片えくぼ 鎌倉真由美
- 92 ① いのちなき風船だからすぐ逃げる 鎌倉真由美
- 93 ⑦ 地に遊び風に遊ばれ春の色 鎌倉真由美

173 ①菜の花や猫の浮気も週刊誌 佐藤 哲夫
 174 ⑥若葉泣く砲撃音の日出生台 佐藤 哲夫
 175 ④告げもせず告げられもせず花菜道 吉田 素子

176 ⑧沸点の低き連れ合ひ山笑ふ 吉田 素子
 177 ⑦戦争がそこに来ている若葉寒 吉田 素子
 178 ④菜の花の隙間に伊方発電所 稲田久美子

179 ⑤淋しくてもう風船になつてゐる 稲田久美子
 180 七輪をはみ出て鯖が焼き上がる 稲田久美子
 181 ⑨制服が光をはじき入学す 佐藤 珠幸

182 ③罇を抱いた小枝を生けてみる 佐藤 珠幸
 183 膳の鯖ニユースを眺め箸を止む 佐藤 珠幸
 184 ⑦アネモネのやけに明るき退職後 陣野千恵子

185 夕昏れは思わせぶりな檜若葉 陣野千恵子
 186 ②手をつなぐその指先に若葉風 陣野千恵子
 187 制服ですました孫を壁に貼る 児玉 利子
 188 菜の花の黄色の圧力春深し 児玉 利子

189 ③筍が皿が立派でかしこまる 児玉 利子
 190 ①もう一度紙風船と置き菓 衛籐 俊一
 191 ①菜の花の黄色いろいろ絵画展 衛籐 俊一

192 風船の肺活量でシャボン玉 衛籐 俊一
 193 ①日出生台憲法九条加え春 足立 鶴男
 194 更衣菓の量ならまず負けぬ 足立 鶴男

195 ④落書きを砂に残して春逝けり 足立 鶴男
 196 ①入学のひかりの中の吾子を追う 足立 町子
 197 ⑤花の雲旅立つときは杖捨てて 足立 町子

198 ③更衣して二の腕をあざとくす 足立 町子
 199 ⑦微笑めばほほえみ返す桜五分 飯田 幸子
 200 ①葉桜の下で来し方考える 飯田 幸子

201 杖を置き青葉若葉の中をゆく 飯田 幸子
 202 ①春光やマザーテレサのホスピタル 平田千代子
 203 春光や手摺に朝の埃浮く 平田千代子
 204 ①月朧犬遠吠えているばかり 平田千代子

第2回 雑詠句会選 & 選評 ◆ 順不同 ◆

下司 正昭 選

《7・16・17・102・172・177》

牧野 桂一 選

156 蟻が這うドームは今も爆心地

(谷川彰啓)

福島の問題からウクライナ戦争、北朝鮮による核実験と世界は緊迫した核問題の中に晒されつづけています。

その中を生きる私たちは、今も現実的に爆心地に生きとし生けるものたちと共に生きています。まぬがれがたい核の恐怖は、ドームを這う

蟻の一匹も私たちもまったく同じです。そのことを爆心地のドームは私たちに教えてくれているように思います。

この句は、小さな蟻一匹の問題を全世界の問題としてリアルに提示しています。五七五という小さな俳句にもこれだけの大きな人間の問題を訴える力があることをしみじみ教えられます。

宮川三保子 選

《1・2・23・26・49・60・84・115・156・177》
 26 茎立ちや戦火の中で産まれし子

(白土正江)

ウクライナ侵攻による爆撃が続く。それは避難所にでもある。そんな戦火の中で出産した女性がいる。

戦争が一日も早く終わり、平和になることを願うのみで母子共に健康で幸せな生活が送れますように願っている。
 茎立ちの季語があつていると思つた。

陣野千恵子 選

《8・22・24・57・60・62・73・165・166・179》
 165 立春の光を入れてジャムを煮る (神 慶子)

寒さ厳しい冬が終わり、やわらかくて暖かい春がくる。生命が少しずつ動き出す春がくる。立春の光を入れてという語句にとつてもその喜びが溢れていて、鼻歌まじりでジャムを作っている姿が目には浮かびます。小花柄のエプロンも浮かんできます。大好きな句です。ところで何ジャムかしら

菅 登貴子 選

《24・48・68・111・127・143・153・163・165・181》

菅 攝子 選

《8・22・23・35・85・87・141・151・179・182》

岸本千鶴子 選

《15・23・52・54・127・129・176・177・182・197》

神 慶子 選

《22・23・28・49・60・148・178・184・197》

野上 眞司 選

《9・10・22・53・58・63・104・145・166・195》

53 夏場所を父に奮発溜席

(田代直之)

風薫る五月、東京の大相撲本場所、その夏場所へ招待。しかも溜席。

何時もはテレビ機軸で観ている父親。これは親孝行の最たるものです。

ましてや地方在住の者にとっては高嶺の花です。全く頭が下がります。

作者のやさしさがにじみ出ております。

坂本 一光 選

《23・24・93・112・114・126・163・171・175・193》

126 またひとつ歳をかさねて花は葉に

(西峯峰子)

桜が咲き散るのを毎年見ながら、いつしか自らの歳を重ねるようになった。この句に出合つて、茨木のり子の詩「さくら」を思い出した。

「ことしも生きて／さくらを見ているか／ひとは生涯に／何回ぐらいさくらをみるのかしら／：／あでやかとも妖しとも不気味とも／捉えかねる花のいろ／さくらふぶきの下をふらりと歩けば／一瞬／名僧のごとくにわかるのです／死こそ常態／生はいとしき蜃気楼と」
一句に詩人の心が凝縮していると思つた。

大神 愛子 選

《27・34・53・66・103・104・112・126・136・138》

34 仏壇に自慢の西瓜見てもらう

(赤嶺信子)

愛情込めて収穫出来たスイカ、心がわくわくして、まずは仏壇にお供えした。第一号の美味しそうな西瓜が、目に浮かびます。仏様もさぞ「立派な西瓜だな」と喜んで居る光景が浮かびます。私も大きな西瓜が大好きです。

安田 文選

《3・41・66・89・112・114・154・161・186・199》

3 無常とは美しきかな花吹雪

(河野則子)

人の縁とは、一期一会美しいものけれども花びらが、吹雪のように乱れ舞い散るように儂い：：今の出会い、その日、その時を大切に生きていきたいと思ひました。

河野 則子 選

《24・45・67・69・87・112・142・149・164・176》

176 沸点が低き連れ合い山笑う

(吉田素子)

芽吹き春。移りゆく自然の中に住んで本句を味わう私たち夫婦も、自然の一部だと自覚させて頂いた。「沸点が低き」の中には、いろんな人生を味わって来た作者夫婦の安らぎを感じる。「山笑う」の季語でまとめたところに、諧謔が感じられて人生の深き味わいと作句技量を感じる。ここでは「沸点の低さ」で表現されているが、おそらく相手は逆に沸点が高いのであるが故に自分には無い性格の者同士が互いに魅かれていてと想像する。頬笑ましい句に出逢った伴せを、笑う山と一緒に読む者に感じさせる秀句。

河野 輝暉 選

《7・15・19・68・87・136・166・168・176・197》

7 銃口にペンは勝るや春の雪

(足立 攝)

本句は「ペンは剣よりも強し」なる西洋の箴言を踏まえている。言論や平和外交の大切さを言つたものなのに「勝るや」と疑問符をつけた。ロシアが突如ウクライナに侵攻し阿鼻叫喚の地獄に陥れた衝撃が作句に。永世中立国のスエーデンとスイスがG3加盟に大舵を切らざるを得なかつた。一方、日本はロシア、中国、北鮮の三大核保有国で囲まれて居る。隣国がまだ大人しかつた時に発布した九条憲法を今だに守り札の様に縋りつき、何時までお念仏を唱え、現実から目を外しているのか。戦後75年も平和を維持可能だつたのは九条ではなく日米安保条約があり隣国が手を出せなかつたためだ。核保有国が餌食と狙う国の憲法を守つてくれる筈がない。米国の核の傘を幻想して、虫のいい甘えをしている今は昔の革新、インテリは、日本が自分の国を守る気がないのに米国の若者の血を流してくれる保障は無いと知るべきだ。思考停止でお花畑で夢心地の場合か。次のウクライナは台湾と日本だろう。掲句は四百余字分を一句に凝縮し得て見事である。

林 香澄 選

《15・23・34・70・79・119・127・154・165・181》

154 ひっそりと春を動かす大吊橋

(谷川彰啓)

九重の夢大吊橋。本当に、もしかすると季節を動かしているのは大吊橋かも、と思わせられ

る程壮大な眺めですね。春を動かす、との着眼がとても良いと思いました。

甲斐 順子 選

《9・19・22・36・77・98・113・127・134・171》

灘波 瑞枝 選

《8・28・50・70・83・103・113・141・143・177》

福田 英子 選

《15・22・79・89・111・119・129・150・184・198》

小川 良子 選

《22・34・36・53・91・106・130・40・174・181》

174 若葉泣く砲撃音の日出生台

(佐藤哲夫)

今もやまない砲撃音に若葉が泣くという所に悲しみを感じました。

平田千代子 選

《7・18・23・41・79・103・112・128・163・165》

安森 範明 選

《22・29・32・34・52・66・98・102・130・136》

66 相槌をうつ相手なく冷奴

(早澤まり子)

長いコロナ禍で、何事も制限され、飲みにも行けなく、友にも会えず心がうつになっっている。早くコロナを終わらせる薬が発見されないものか。冷奴が一層淋しさを際立たせている。

嶋末 洋子 選

《18・28・66・93・138・176・179・198・199・201》

早澤まり子 選

《2・7・22・23・155・159・181・199・200・201》

181 制服が光をはじき入学す

(佐藤珠幸)

私の子供の頃は貧しい生活で入学式に制服が、間に合わなかった記憶があります。やっと届いた制服を着て、ガラスにその姿を写して見たのを思い出します。今、真新しい制服に朝日を浴びて、キラキラ輝いて、はちきれそうな笑顔でしようね。作句者も顔をほころばせて見守っておられる光景が目には浮かびます。幸せな気持ちになります。

御手洗豊海 選

《3・22・59・66・83・93・103・104・146・181》

時松由美子 選

《2・4・22・93・102・114・123・135・174・199》

西峯 峰子 選

《22・23・51・103・127・142・163・164・165・195》

森山 秀子 選

《2・3・33・41・46・80・88・90・119・156》

岡村 君香 選

《7・8・29・36・66・83・86・114・175・176》

36 百年の家より高くこいのぼり

(赤嶺信子)

百年の家、昔ながらの大きく立派な歴史ある家に生まれた御子息を祝うこいのぼり。家より高く、悠々と泳ぐ姿が思い浮かびました。また、最近では、そのような鯉のぼりも少なくなっている中で、そのこいのぼりを見上げている作者の心情をも想像できる句だと思いました。

園田 武子 選

《2・22・26・62・66・106・113・155・168・198》

井上 則子 選

《22・23・41・83・93・119・124・165・174・181》

有村 王志 選

《22・23・28・58・66・79・83・177・178・179》

177 戦争がそこに来ている若葉寒

(吉田素子)

ロシアのウクライナへの侵攻によって各国の対応がはっきりとしてきた。ウクライナを支援して武器の供与をはじめ経済制裁や難民受け入れ等々である。一方、台湾と中国の問題、我が国では日露漁業交渉の軋轢を生んでいるが、今日、どこかで何かが一触即発で弾ける危機を掲句は示している。

丘 友子 選

《7・48・66・93・123・124・136・165・173・181》

181 制服が光をはじき入学す

(佐藤珠幸)

以前、小学生向けの雑誌のコマーシャルに「ピカピカの一年生」というのがあったが、その言葉を彷彿とさせる句である。中七の「光を

はじき」が眩いばかりの未来への希望を窺わせる。

田原 夏子 選

《7・22・58・62・79・106・136・155・174・181》

佐々木 玉 選

《22・23・44・56・62・68・86・168・179・182》

168 方言をまる出しにする立夏かな

(河野泉)

東京で学生の時2階の部室から下の友人に、大声で、「そこからおらんて!!」と言った事を思い出した。もちろん友人には通じなかったが、「おらぶ」は万葉集の時代から使われる古語で「叫ぶ」「哭ぶ」の字を当てている。人がいないという意味の「おらん」にも使うが、この微妙な違いは大分の人しかわからない。掲句は大分弁とは言っていないが、方言をまる出しにして夏を迎える。元気の出る句である。

本田 圭子 選

《8・77・79・88・113・114・163・165・170・184》

永松左世美 選

《15・22・23・54・75・91・113・124・189・199》

原田 勝子 選

《2・46・52・91・105・108・125・154・170・174》

174 若葉泣く砲撃音の日出生台

(佐藤哲夫)

「若葉泣く」がとても気に止まりました。新鮮な空気の色になる若葉壮明な今、世に出て来

たばかりの自然な生き物、景色を打ち砕くような砲撃音日出生台に住む人も可哀想だと思いうちで一杯になりました。

甲斐加代子 選

《23・30・57・79・83・106・141・171・177・199》

立麻 琴路 選

《2・13・15・22・24・48・79・86・126・186》

小野みち子 選

《22・24・28・51・87・94・106・133・155・165》

久枝 花城 選

《21・28・56・88・91・98・127・158・168・176》

176 沸点の低き連れ合ひ山笑ふ

(吉田素子)

この女性はとかく怒りっぽい男性と結婚してしまつた。昔なら手を出したり蹴られたりもあつたろうが、今は違う。

しかし、今でも口でやかましく、ひどくやかましく言う男性は時々いる。しかし、この女性はそのいう夫にいちいちかまわない。「山笑ふ」は単にまともに取り合わないだけではない。今や、「山の神」と化したこの中高年の女性は、「瞬間湯わかし器め、またか」と、心の中でざ笑い、上出来の俳句のタネにしてしまつた。

松廣 李子 選

《36・41・69・84・88・90・96・115・178・189》

鎌倉真由美 選

《15・22・30・33・61・69・81・133・176・184》

33 ありがとう今更妣に秋の暮

(安田 文)

とても共感出来る句です。

親が子に、子が親に、なかなか面と向つて「有難う」の言葉がいえでないのが現状でしょうか。親には充分に尽くしたから後悔はないわと思つていても、一年が経ち、二年が経ち、何でもない時に突然母親に逢いたくなる。母の声は、はっきり耳の奥に残っているのに母が見えない。秋の夕暮れ時は一層、絞るような恋しさを覚えます。居るだけで幸せをもらっていたのに、今になつてわかるとは。

私も今更ではありますが「ありがとう母さん」

加納 知子 選

《9・22・66・71・78・79・98・122・156・175》

71 農作業愛しむ母の秋日和

(菅登貴子)

俳句は心のつぶやきと、いつも思います。朝倉豪雨でわが家が流されるまでは私も毎日畑仕事にいそしんでいました。よその畑を見る度に、なつかしく思い出します。この句にはそんな私为重なつて、心をつぶやきを、そのまゝ句にして頂いたようで、ほっかりと温かい気持ちになりました。作者の母に対するやさしさが感じられました。うれしく思いました。心がつぶやきを他人と共有出来たらうれしいです。この句で癒された一時でした。

赤峰佐代子 選

《9・23・26・27・66・78・91・129・184・204》

白土 正江 選

《9・22・23・42・82・98・156・196・197・201》
197 花の雲旅立つときは杖捨てて

(足立町子)

美しい桜の花が爛漫と咲いている。歩くのが不自由で杖が手離せない私は、あの桜の下までなかなか行けず残念である。でも私が、旅立つ時はきつとこの杖を捨てて、若い頃のようにサツと歩きだしていることでしょう。あの桜の下へ。下五の「杖捨てて」がどこにも頼らぬ自立した作中の私の意志を示してとても素敵でした。

谷本親史 選

《22・35・49・51・67・68・96・125・189・197》
125 四月来ぬ吾子みし部屋の広さかな

(西峯峰子)

巣立っていった子どもの部屋での感慨句。安堵、寂寥の相交じる複雑な思いが伝わる。卯の花のおう卯月。学制では新学期、企業も年度始期の四月である。親には喜びの裏側に一抹の空虚感の方が募る。育った幾年の間、「みし」で部屋に馴染んだ生活を振り返り、込み上げる感情も「かな」で表した。

子離れは生物界の定め。格調高くに普遍を詠みあげた句を、帰巢本能で頂いた。併せて「終着駅は始発駅」のことばも参考に。

山本 悦子 選

《8・9・23・52・74・87・91・125・176・195》

菅 勲 選

《1・8・36・41・67・96・101・107・113・181》

足立 町子 選

《1・9・28・29・74・109・129・155・163・175》
1 桜散る窓や抜歯のうがい水

(河野則子)

覚悟はしていたが歯科のあの椅子はどうも落ち着かない。ましてや今日は私にとつて恐怖の時間。手を握りしめてカチャカチャと響く金属音を聴きながら長い時間をかけて奥歯一本を抜いた。医師から「うがいをしてください」と言われハツと我に返った。

窓からハラハラと散る桜が見えた。こんなきれいな桜があったのだ。日常のちよつとした出来事をサラツと詠まれている作者の感性が素晴らしい。

上田たかし 選

《7・9・35・66・92・93・131・134・151・174》
151 かけ出してもかけ出しても青い空

(加藤征孝)

この空がどこまで続いているのかという誘惑に駆られて、少年は走り出す。しかし、いくら走っても青空は途切れることはない。この躍動感を「かけ出しても」というリフレインによって、句の幅が広がり、読者の想像を膨らましてゆく。平易な叙法だけど、読者を惹きつける。

赤嶺 信子 選

《21・22・23・77・111・157・158・165・184・199》
21 銅像を柔らかくして八重桜

(安森範明)

銅像のまわりを囲むように八重桜が咲いている景色が見えます。硬い銅像を柔らかくする程のスケールの大きな、そして行ってみたいくなる様な句です。中七の表現が気に入りました。春らしい色と質感が手に取るようです。

合田 文美 選

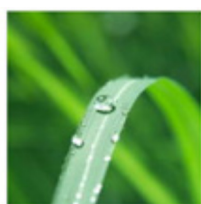
《21・31・56・73・85・98・126・163・171・190》
190 もう一度紙風船と置き薬

(衛藤俊一)

紙風船は、赤、青、黄色：と、明るいカラフルな色が繋ぎ合わさってできている。ポンポンと、軽やかな音をたてて遊んだ頃を懐かしく感じる人は多いだろう。この軽快な紙風船と置き薬の対比が素晴らしい。紙風船のような色とりどりの人生を歩まれてきたのではないのでしょうか。まだまだ、これから、再び、人生を重ねた逞しい掌でポンポンと、空高く風船を飛ばして欲しい。

夢野はる香 選

《15・23・40・60・79・87・91・106・128・184》



今号の第二回雑詠句会には、天籟通信所属の夢野はる香さん、山本悦子さんが選句に加わってくれました。お二人とも忙しい中をありがとうございました。

雑詠句会、自薦作品の投句資格は会員限定ですが、選と選評はなるべく広範な意見を取り入れるのが望ましいので、会員外や他県の方にもお願いしています。

新会員の方が増えて、県協会の様々な仕組みがよく分からないという声を聞きます。たとえば雑詠句会と自薦作品とはどう違うのかというようなことです。以前からの会員の方には当然なことですが、コロナ禍で人が集まる催しができなくなったので、身近な会員に聞くことがで

自薦作品募集

※自薦作品を募集します。一人四句で協会未発表のものをご応募ください。

※この自薦作品四句と、年二回の雑詠句会(各三句)の一人計十句が特別選者による年間一句賞の対象になります。

※締切は十月三十一日(月)消印有効。

※郵送やメールなど、用紙形式にはごだわりません。便利な方法で返信してください。

※今回は選評の募集がないのでフアックス用紙は同梱していません。

※送り先は事務局まで。

※年間一句賞は次回総会で表彰するとともに会報一二八号で紹介します。

きないことも一つの原因でしょう。

雑詠句会と自薦作品の違いは前にも書きましたが三句、四句の違いだけで、内容は同じものです。これに限らず分からないことがあります。事務局にたずねてお聞き合わせください。事務局はそのためにありますので遠慮は不要です。

それから選句が難しいという相談がありました。確固としたものがあるわけではありませんが、一般的な注意点を上げてみます。

まず普通に読んでみて、心に残ったもの、共感・感動したものを選びます。これが基本です。次に、その作品になぜ感動したのか、その理由を探ってみます。たとえば

「母の恩海より深し露の臺」

のような句で感動したという人がいますが、それは感動の内容が「海より深い母の恩」と言葉でそのまま書いてあるからです。直接書かれているので分かりやすいのですが、膨らみがありません。俳句は書かれてある事柄ではなく、書かれてあることの向こう側を味わう文芸です。

今回の第32回現代俳句大会で大会優秀賞を受賞した河野則子副会長の作品を見てください。

「ふきのとう刻めば母が句い立つ」

作中の私は台所で露の臺を刻んでいます。すると独特な鮮烈な香りがあたりを満ちします。その香りで、当時の母が今の自分と同じ格好で露の臺を刻んでいたことをふいに思い出します。それは幼い私に、露の臺の刻み方を教えてくれたなつかしい母の記憶です。私はこの時期、露の臺を見るたびに、若かった頃の母を昨日のことのように思い出すのです。

……このように、河野副会長の作品には、「母の恩」「母のありがたさ」とは一言も書いていないのに、直接書く何倍も鮮やかに、何倍も強く母親像が屹立します。感受性の強い人はこの句で涙する人もいるでしょう。「母の恩」と書いてしまつては、涙がでません。書いてあることから連想して、その向こう側が味わえるようになれば、もう選句は初心者ではありません。俳句は「説明をしない」と教わりますが、それはこういうことなのです。



大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村王志



《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL: <http://www.gendaihaiku.net>

E-Mail: info@gendaihaiku.net